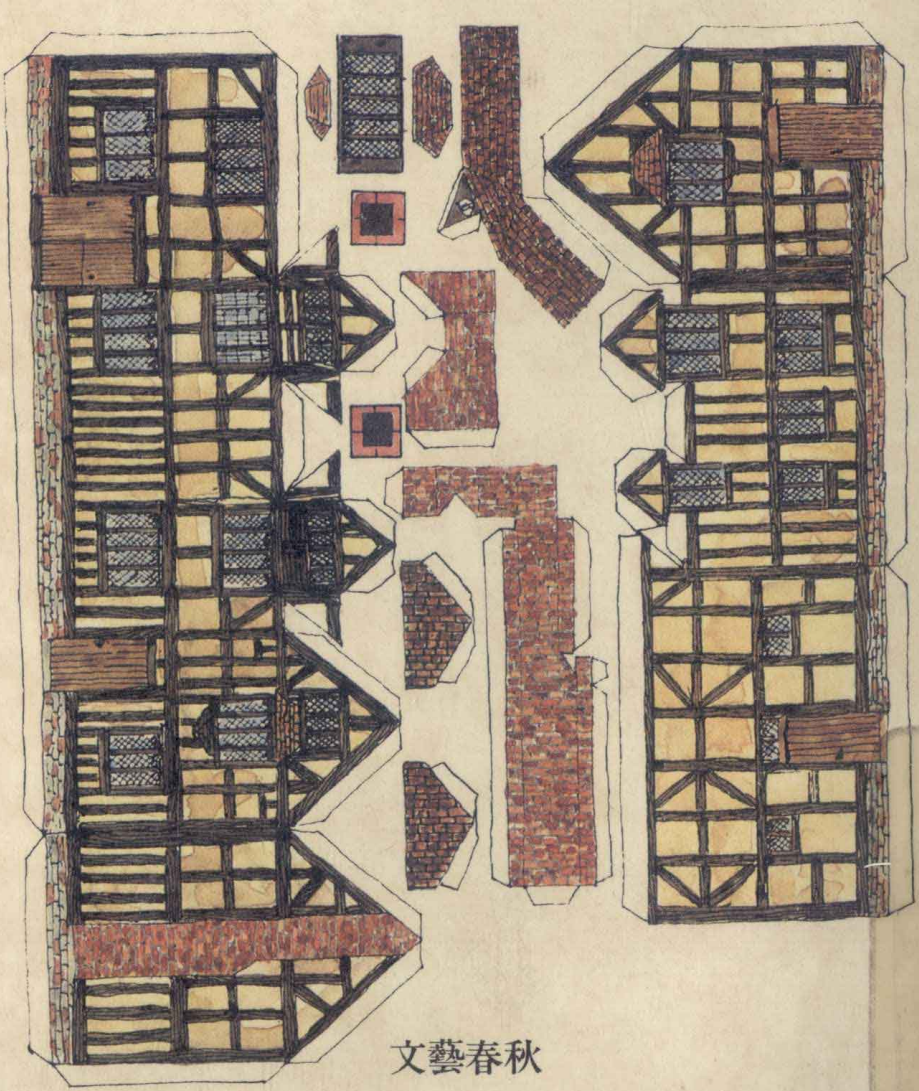
シェークスピアは推理作家

田中重弘



文藝春秋

シェークスピアは推理作家

田中重弘

文藝春秋

著者略歴

1938年和歌山市生れ。和歌山工業高校染織科，上智大学文学部哲学科卒業。染色工場経営を経て1967年渡欧。ウィーン大学で哲学，美術史，文学を学ぶ。1979年からハンガリーのブダペシュトに在住，バロック期以後のヨーロッパ文化を研究している。著書にモンテーニュの欧州見聞旅行をテーマにした「女の世紀を旅した男」（北洋社），ハムレットの推理劇の成り立ちを劇の進行に沿って解明した「ハムレットの謎」（講談社）がある。

シェークスピアは推理作家

定価1500円

1982年3月5日第1刷

著　　者　田中重弘（たなかしげひろ）

発行者　半藤一利

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話　03—265—1211（代）

印　　刷　凸版印刷

製　　本　加藤製本

©Shigehiro Tanaka 1982　Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

シェークスピアは推理作家／目次

第一章　三浦按針は同年生れ　7
日本人のシェークスピア理解への糸口
第二章　嗅覚も味覚も小道具　29
第三章　巧妙な数のトリック　51
第四章　旺盛なスチール精神　75
第五章　シンボルをフルに活用　97
第六章　かかあ天下を背景に　119
第七章　鍵となる登場人物の名　141

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八章　ゆさぶりの大きい『ハムレット』　163
第九章　ハムレットの名にも謎が……　187
第十章　トリック、トリック、逆転トリック　207
第十一章　強き者よ、汝の名は女　229
終　章　推理の迷宮　251
あとがきに代えて
読者への挑戦　276

装幀　安野光雅

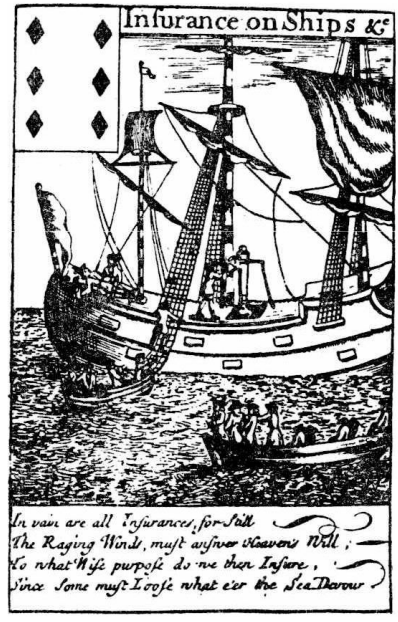
シェークスピアは推理作家

劇は閑室に獨坐して、含味咀嚼して讀む爲の物ではない。專ら、大衆と共に、不知不識の間に所謂群衆意識の影響を蒙りつつ、寛いで、享受氣分になって觀賞する爲の物である以上、其當座の視、聽覺に於ける乃至相像上に於ける、いはゞ、幻覺的の效果が其第一義であるべき筈だ。

坪内逍遙『シェークスピア研究栞』（昭和十年版）一八頁

第一章　三浦按針は同年生れ

——日本人のシェークスピア理解への糸口



海上保険　生命保険を絵柄にしたトランプ
18世紀　大英博物館蔵

シェークスピアに近づくに当って、日本人ならばどうしても無視できない人物がある。それが三浦按針である。例の『ショーグン』の主人公ブラック・ソーンのモデル、ウィリアム・アダムズである。

アダムズが日本に来た最初のイギリス人であることはよく知られているが、それがどうしてシェークスピアと関係があるのかと訝る方も多いかもしれない。しかしアダムズがシェークスピアと同じ年の生れであることに気がつけば、なる程と思いあたるだけでなく、なかには、色々な疑問はそこから解けてくるにちがいないと思い、早速資料さがしに走りまわる方もあるのではなかろうか。

正直なところ私もそのひとりである。シェークスピアの作品は私にとって無数の疑問の連続であり、どの作品をとっても歯が立たない代物であった。日本語の「名訳」を前にするとますます解らなくなる。

アダムズが日本に来たり、イギリス人やオランダ人が会社組織で日本との交易をはじめていた時代に、どうして『ベニスの商人』のアントニオは積荷に保険をかけていなかったのか。当時のベニスには独自の船舶保険があり、ラグザ(現在のドゥブロブニク)やジェノヴァのような地中海の他の競争相手は言うに及ばず、ミラノの金融業者も海上保険を手がけていたのである。もちろんイギリス

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

でも「商人の通常慣習」として保険がかけられていた。一五七三年にイギリスの商船がロシアへ行く途中、スェーデンの軍艦に拿捕された。その商船「ホワイト・イーグル号」の乗組員の一部はデンマークに逃れたが、彼らは『ハムレット』の舞台でもあるヘルシンゲルの法廷で、「積荷には〝通常の商人慣習〟にしたがって保険がかけられていた」と証言している。一六〇一年にはイギリス国会で、「商人間の保険のことどもに関する法律」が成立し、エリザベス女王の名で公布されて、その制度はより整ったものとなっている。

海上保険は保険のうちでも、最も早くから確立されたもので、ロドス島ではすでに紀元前九一六年に、冬の危険な期間を除いて実施されており、それを裏づける法律も存在していた。このロドスの保険業は古代中世を通じて存続し、主役の座をベニスに譲るまで東西交易のかくれた大役をひきうけていたのである。

ベニスの海上保険はベニス共和国が商船隊とそれを守る艦隊を一手にひきうけていた関係で、その保険料は極めて安く、平均してわずか五％（一航海につき）であったという。しかもベニスには再保険制度もあり、アントニオが四方向に出した船が皆沈んでも、損は殆んどなく、当然のことながら安全度が高く、したがって『ベニスの商人』のお話は最初から成立しないということになる。

再保険制度とは保険業者が互いに危険度を少なくするため一定の率で保険業者が保険業者に保険をかける制度、または保険業者専門の、ひとつ上の保険業者を設ける制度のことで、ヨーロッパの産業革命はこの再保険制度と株式会社制度の確立した十九世紀に生産力が加速されて成立したものである。

ベニスはこの点で、ひと足も、ふた足も先を歩んでいた。いや、ひと足ふた足どころではない、

何百年も先を進んでいた、当時の最先進国なのである。『ベニスの商人』を見た当時のロンドンの市民はそういうことも知らず、また地元の商人たちが「慣習化」していた保険制度も知らず、アントニオの商法の大胆さを実感し、親友のバッサニオにユダヤ人から金を借りてまで金を工面してやるという気風の良さを楽しんだのであろうか。

多分そうではなく、ロンドンの市民は保険のことぐらいは知っていたはずである。とすると何故か。こうして私の『ベニスの商人』解釈は第一幕第一場にして行き止ってしまっていた。この疑問を抱くのは私だけではあるまい。何故、シェークスピアはありもしない状況をベニスに設定したのであろう。不思議なのは、この非現実的な場面設定についていった当時のロンドンの観衆である。何故、当時のロンドンの市民が、保険制度のない先進国家ベニス共和国というありもしない状況設定に感動し、ついて行けたのであろうか。

名訳で評判のF氏は、自らその不自然を敏感にさとり、劇そのものをしらじらしく感じる日本の観客の反応を演出家としても体験されたようである。自訳の文庫本の解題に、

「『ヴェニスの商人』を現代の観客の目にもなお馬鹿らしくなく観せる演技法、演出法はただ一つしかない。それを演じる側が観客よりさきにその馬鹿らしさを承知してかかること」

という奇妙な言い訳をされている。氏の「名訳」はそれとして価値があると思うが、かなり原文とはちがったものになっている。氏演出の『ヴェニスの商人』で日本の観客が正直な反応をしたのだろう。日本の観客が「馬鹿らしさ」を感じるのは翻訳の「名文」にもその責任があるのではないか。シュレーゲル他のドイツ語訳に基づく演出では、ドイツやオーストリアの観客が素直にその虚構の世界にひき込まれ、「馬鹿らしさ」など感じていないことを私は知っているからである。ドイ

ツ語と日本語との差異のせいだと言われるかもしれない。しかし、それは少しちがうようである。ドイツ語訳ではいずれも、原文と同様に、舞台が虚構の場であることが、明白にわかるような細工がなされているのである。

例えば、第一幕第一場の冒頭で、アンドルー（またはアンドリュー）号という船の名が出てくる。これがシュレーゲル訳ではアンドルーがハンスとなっている。

アンドルーという名は十二使徒の一人アンデレ（ギリシア語のアンドレイア＝男らしさ・勇気から来ている）に由来するもので、姓としてもファースト・ネームとしてもごくありふれたものである。アンダーソン（かの童話作家アンデルセンも同系）はアンドルーの息子の意で、アメリカでは十番目位にポピュラーな名である。

このアンドルーという名は十二世紀以後、英国ではスコットランドを中心に一般化した。聖レグルス（英語読みではリギュラス）が聖使徒の遺骨を持ってスコットランドに漂着したのがきっかけとなって、アンデレはスコットランド守護の聖人名とされている。しかし、スコットランドにクリスティアン・ネームが定着したのは、『マクベス』に出てくるマルコム（三世）の妃マーガレットによってである。レグルス漂着以後何百年もの間、スコットランドは一部の地名を除いてはキリスト教の聖人の名前をつけることはなかった。だから『マクベス』にはゲール（ケルト）系とピクト系の名前しか出てこない。あの『マクベス』における最後の勝者マルコム三世の妃のすご腕によってスコットランドは全土がキリスト教化され、クリスティアン・ネームが浮上するのである。妃はまず自分の息子にイギリス王家伝統の、エドワード、エドマンド、エドガー、アレクサンダー、デイビッドという名をつけたが、アンドルーの名はない。それは彼女はイングランド（サクソン）王家の伝統を

スコットランドに植えつけようとしたからである。

シェークスピアの時代のロンドンの市民であれば、アンドルーという名を聞けば、それがペテロの弟で、漁師のアンデレのことだと知り、更にその目の前でキリストがパンと魚を増やす奇跡を行った目出たい人物であることを直ちに了解する。したがって「アンドルー号」という船名は当時の観客の耳には、竜宮城行きのわが「宝丸」、といったような意味に響いたはずである。シュレーゲルが「わがハンス宝号」と訳したのは、この『ベニスの商人』が唯のお話であることを観客に解らせようとしたからに他ならない。シュレーゲルが、アンドルーのドイツ名である「アンドレアス」を使えなかったのは、十九世紀のドイツは聖書の世界と無縁で、「アンドレアス」ではこのような連想を観客に与えなかったからである。

聖アンドルーの名のついた地名はイギリスに二十以上もあるが、いずれも海や川に面した、もともとは漁師の村か町である。ドイツでも同じで、ハンガリーでも聖エンドレ（センテンドレ）はドナウ河に面した漁村である。聖アンデレは、ギリシアとロシアの守護の聖人でもあるが、ギリシアは海にかこまれた国であり、ロシアは川と無数の湖沼の国であるから選ばれたのであろう。

三浦按針の義理の弟もアンドラエまたはアンドレアスという名を持っていたことが、東インド会社の記録を見れば解る。この洗礼名は使徒アンデレに由来する現世御利益的な、ありがたい名前である。平戸に駐在していた中国商人の親玉が同じ名前をつけていたのもあやかりの気持がなかったとは言えまい。

シェークスピアの時代の漁師たちが遠洋（ニューファンドランド沖）まで繰り出し、ニシンとタラを大量にとって塩漬けとし、輸出して欧州水産市場を独占するまでになっていたのも守護の聖人アン

デレと海上保険のおかげだったのである。

それでも魚はだぶつき、ロンドンでは肉を食べてはいけない日――つまり魚の日――が金曜だけでなく、土曜と水曜にまで及んでいた。これは国会の議決によって定められたもので、まず一五四八年に土曜日、一五六三年には水曜日が指定されたのである。肉禁止の期間としては他に四季の大斎日、復活祭前の四旬節（四十日間の斎期）があるから一年のうち半分は魚の日となる計算であった。

復活祭の前のほぼ一ヶ月の間も、肉を食ってはいけないというのは畜産農家に打撃を与え、反発を食いそうなものであるが、そのようなことは全くなかった。当時はまだ冬の間、家畜に充分に食わせるだけの飼料がなく、豚も家きん類も数を維持するための種だけを残して、秋に殺してしまうのが普通であった。四十日間もの長い禁欲の期間は、秋に塩漬けや燻製にした貯蔵品が切れたり、気温が上って保存がきかなくなったりする春を前にした、頃の良い時に行われるヨーロッパ人の知恵なのである。だからシェークスピアの時代はアンドルーさまさまの時代なのであった。

つまり、あのアンドルー号は、いわば「えびす大黒丸」なのである。アントニオの友人は、「今までえびで鯛を釣り上げてきたうちの大黒丸だが、それでもその縁起の良い船が難破する夢を見る。だから君が、面白くなく、苛々するのは当然だ」となぐさめるわけである。

この海外貿易に対する現実の不安感はアントニオの友人二人によって見事に表現されている。その見事な語り口によって観衆は保険のことも忘れ、むしろ大商人アントニオなら四隻以上同時に船を出して危険分散ができるんだな、なるほどと納得させられる仕掛けである。ここまではドイツ語訳の助けで私には簡単に解った。

しかし不思議なのは、二人の友人の口から当時の最も危険な存在であった海賊のことが何ひとつ

語られていないことである。十六世紀に、地中海は海賊の時代に入り、回教国、キリスト教国とも海賊を半ば公認し、そのためベニスの海上保険料も引き上げられている。『ベニスの商人』は各国のその海賊戦が最も酣(たけなわ)になってきた十六世紀末に初演されたものである。

海賊戦は東洋でも繰り拡げられており、イギリスの東インド会社の記録によると、ウィリアム・アダムズはオランダの海賊商法に腹を立てた平戸のイギリス商館長コックスからオランダから手をひけという勧告を受けている。アダムズは当初オランダの旧インド会社に雇われて一五九八年にオランダを出て一六〇〇年四月に日本にたどりついて囚(とらわれ)の身となった関係で、「帰化」後はオランダとイギリスの両国の為に「働いて」いた。つまり徳川家と合せて三方から収入を得ていたチャッカリ男であった。

そのチャッカリぶりが四十歳近くになって日本に来て日本語をマスターするという才能の源なのであろう。しかしこうした男が出るほど、東洋の貿易戦争も白熱化していたわけである。ベニスの海上保険料もシリア・ルートでは一六一一年に二〇%、その翌年は二五%という高率になり、事実上保険の機能を停止してしまった。しかし一般に『ベニスの商人』が書かれたとされる一五九八年(私の説は一五九五年)にはまだベニスの保険業務は通常とほぼ変らず、おそらく上演回数を重ねるうちにベニスの保険料は逆転し(一六〇〇年ごろ)、ベニス商船隊のドル箱路線だった聖地巡礼船——乗客の主体は南ドイツ人だった——も一六〇八年以後は殆んど運航されなくなってしまった。つまりヨーロッパの近代は、中世に築かれた信用経済の破壊から始まったのである。

イギリス東インド会社の報告文をまとめたブラットの著書(一九三三年神戸刊・英文)を見ると、オランダの真似をして平戸から中国ジャンクを拿捕して積荷を巻き上げなくては採算の合う「商売」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com